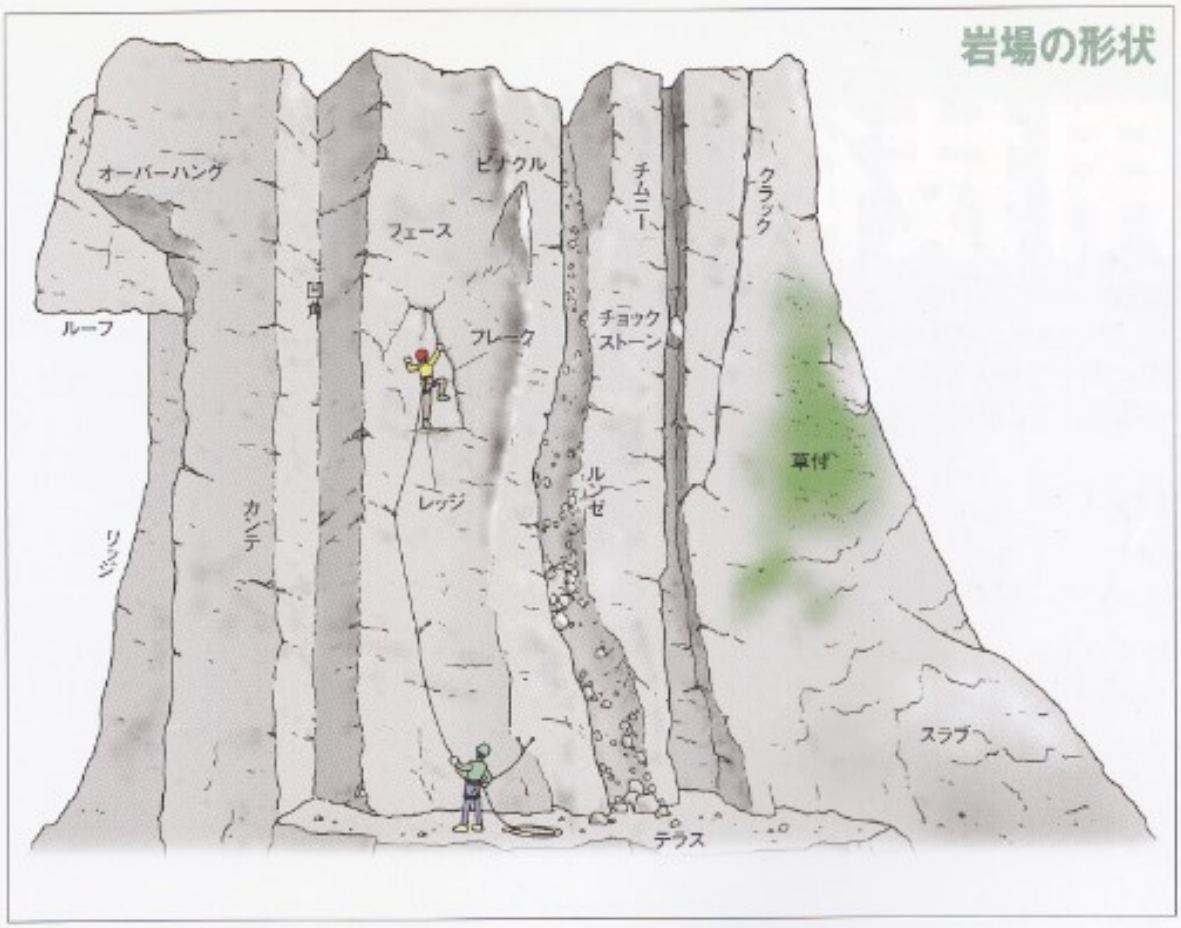
岩場の形状とルートファインディング



■リッジ

尾根状に続いた岩。そこをたどるラインは、ルートファインディングが楽な場合が多い

■ルーフ

非常に前傾した壁。岩によっては、180度に前傾している場合もあり、まさにそれはルーフ＝屋根そのもの

■オーバーハング

手前にせり出した壁。フリーで登ることは困難で、人工登攀になることが多い。単に「ハング」ともいう

■フェース

垂直前後の壁でホールドの形状はさまざま。どのような岩壁にもこの傾斜の部分がある

一見のっぺりとした岩場でも、よく観察すると意外なほど多くの凹凸や割れ目があるものだ。岩登りでは、そういった岩の形状を利用して、弱点となる部分を選んで登る。

たとえば、未踏の岩を見つけて、地主さんにお願いして登らせてもらうとする。岩の面にくぼんだ部分が上まで続いている。それはディエードルという形状で、登るにあたり弱点として期待できるだろう。また途中に広い棚（テラス）があれば、そこでビッチを切ることもできる。このように岩の形状は、登る際にとても大切な要素となる。この弱点を利用して、左右にまたは下りぎみになど、巧みにルートを登っていくことをルートファインディングという。

クライマー同士は、いわば暗号のように岩の形を表現して意思疎通を図っている。しかしカンテやディエードルはドイツ語、フェースやクラックは英語、ほかにもフランス語を使うなど混乱しやすいものもある。ルーフとオーバーハングの違いなど微妙なものもあるが、細かいところはあまり気にしないでほしい。

ピナクル

岩稜や岩壁上に突き出た岩塔。小さなものはスリングを回して確保支点や懸垂下降に使用したりする

凹角(ディエードル)

凹角状の部分。岩の弱点としてルートがひかれることが多い。ステミングという動作が連続する

カンテ(アレート)

岩の飛び出した角の部分。リッジよりも急峻な場所。ここも明瞭なラインとなるが、非常に露出感がある

スラブ

傾斜のゆるい垂直以下の壁。簡単と思いきや、手がかりのない場所が多く、あなどれない。シューズのフリクション性能が登攀のカギ

クラック

岩の割れ目。カム、ナッツ、ハーケンなどの支点をセットし、ジャミング技術で登ることができる

レッジ

テラスよりも狭い岩棚。腰かけられる程度のスペースしかない

テラス

人が寝られるほど広い岩棚。ビバークサイトとして使われることもある

バンド

レッジが横に長く伸びた部分。岩壁を大きく横切っているものも。登攀中そこをトラバースし、違うラインに合流することもある

チムニー

体がすっぽりと入ってしまう大きさのクラック。登りやすいが、支点がとりにくい

オフウィドゥス

体がぎりぎりで入らない狭さのクラック。半身をはさみ込んだ奮闘的な登りとなる

フレーク

板状の岩。一部が壁に張り付いているだけで、大部分は離れている場合が多い

ルンゼ

岩場にある急峻で狭い溝状・谷状の地形。岩の弱点で古典的な登攀ルートとなる場合が多いが、落石や雪崩の通り道でもある

草付

草でおおわれた斜面。バンドや岩壁下部のアプローチなど緩傾斜帯にできやすい。急な草付は不安定で危険な登攀となる場合も多い

チョックストーン

岩の狭間にはまり込んだ石。これにスリングを巻きつけ支点にすることもある